

第4章

調査研究

1 研究の概要

(1) 研究主題

キャリア発達を促すためのカリキュラム・マネジメント

～新しい職業学科として社会に開かれた教育課程の構築を目指して～

(2) 主題設定理由

はじめに調査研究について、「文字通り、調査による研究である。校内外における教育実践等に関する情報を、資料・統計として調査及び研究するものであり、研究内容に関する専門性の高い部署が担当する。取り組みについては年度当初に検討して決定している。」とある。そこで、外部との関わりが多い進路指導部が幅広く情報収集を行い、学習活動等に還元することを一つの目的としてここ数年取り組んできている。併せて、3学年の進路決定に至るまでの経緯などの周知や、卒後支援からみる在校時の指導や指導の工夫等につなげていただくために、進路研修を研究の一環で実施してきた。

第8次研究では、それまでの「調査」をもとに、学校内での取り組みに重点を置き、専門性の向上や新学習指導要領の理念に沿ったキャリア教育の推進につながる取り組みを行ってきた。

1年次である一昨年度については、職員の就労に対する知識や認識の向上、意識改革を目指すべく、学校内でできることがないかを進路指導部内で話し合い、まずはできるところから着手していくことで教職員の校内での進路に対する認識を変えていくことができるのではないかと考え研究を進めた。2年次の昨年度については、1年次の調査研究での課題となった点について改善を図ることと、成果の深化を図ることに焦点を当てて研究を進めた。2年間の成果として、掲示物やコーナーを新設・整備、手引きやパンフレットなどの作成、整合性をもたせられる実習の振り返りツールの整備などがあげられた。課題としては、情報の精査・整備、整合性・系統性、スタンダード作りなどがあげられた。

今年度については、過去2年間の課題の改善を図ることと、成果の深化を図ることを継続して行う。そして、第8次研究のまとめとして、進路指導における学びの連続性・系統性について具体化を図るべくツールの作成などに着手することで考えている。具体的には、現存の今養版キャリアプランニング・マトリックス（以下マトリックス）に「生涯にわたる段階」（仮）を新たに設け、各項目を整備することで考えている。今年度それらのツールを活用しながら社会に開かれた教育課程の実現を目指し、地域の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントに取り組み、生涯を見据えた観点で生徒のキャリア発達を効果的に促すことができるよう研究を進め、ツールの完成に向けて準備を進めていくこととした。

(3) 研究の内容と方法

ア マトリックスについて、3学年段階の次に生涯を通じた観点での段階を新たに設け、新学習指導要領の理念に沿ったキャリア教育が推進しやすくなるためのツールの作成。

イ 評価表と実習日誌の整合性を全学年図り、「社会に開かれた教育課程」と「地域の特色を生かしたカリキュラム・マネジメント」を密接に関連させられるツールとなる書式の作成。

ウ 昨年度課題となった点について改善を図ることと、昨年度の成果の深化を図る。

(4) 推進日程

月日	会議・研修	主な内容
4月 7日(火)	全体研修①	研究の概要、昨年度までの研究の確認
4月 21日(火)	第1回研究推進委員会	今年度の研究の見通しについて
4月 22日～ 5月 15日	進路指導部研修①	部員による今養版キャリアプランニング・マトリックスの生涯にわたる段階の試案作成

5月21日(火)	第2回研究推進委員会(臨時)	第8次研究計画の変更について
5月22日～ 6月12日	進路指導部研修②	現場実習日誌と評価表の整合性を 図った書式の作成
6月～	通年	基礎的・汎用的能力について、企業等 からの聞き取り
6月9日(火)	6月進路指導部会	進捗状況確認
6月19日(金)	第3回研究推進委員会	今年度の研究計画について
6月26日(金)	全体研修②	4つの研究の計画発表
6月29日～ 7月31日	進路指導部研修③	部員による今養版キャリアプランニング・マトリッ クスの基礎的・汎用的能力での振分け
7月17日(金)	7月進路指導部会	進捗状況確認
8月3日～ 8月21日	進路指導部研修④	作成した試案や書式等の整合性を図る
8月14日(金)	8月進路指導部会	進捗状況確認
8月24日～ 9月30日	進路指導部研修⑤	現場実習先からの聞き取り及び日誌と 評価表の検証と修正
10月9日(金)	10月進路指導部会	中間報告内容確認
10月14日(水)	第4回研究推進委員会	4つの研究の進捗状況の確認
10月16日(金)	全体研修③	4つの研究の中間報告
10月19日～ 12月18日	進路指導部研修⑥	外部から聞き取りを行った基礎的・汎 用的能力についてのまとめ
1月18日(月)	1月進路指導部会	調査研究内容確認、読み合わせ
1月27日(水)	第5回研究推進委員会	4つの研究の成果・課題の確認、次年 度の研究についての検討
2月 5日(金)	全体研修④	4つの研究の最終報告
3月 1日(月)	第6回研究推進委員会	次年度の研究についての検討

2 研究の実際

(1) 今養版キャリアプランニング・マトリックスの改訂について

キャリア発達にかかわる諸能力について、本校のマトリックスは、4領域8能力をベースに作成されている。昨年度の調査研究でも取り上げているが、「4領域8能力」については、生涯を通じて育成される能力という観点が薄い、固定的にとらえられている場合が多いなど、いくつか課題が指摘されている。その課題を克服するため、中央教育審議会では改めて分析を加え、「分野の職種にかかわらず、社会的・職業的に自立するために必要な基盤となる能力」として新たに「基礎的・汎用的能力」を示し、①人間関係形成・社会形成能力、②自己理解・自己管理能力、③課題対応能力、④キャリアプランニング能力の4つの能力が示された。それぞれ独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にあることが重要であり、これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身につけさせるのかを、学校や地域の特色、生徒の発達段階などによって具体的な能力を設定し、工夫し実践を通し、生涯にわたって達成していくことが大切である。つまり、高校までのキャリア発達を支える能力の育成だけではなく、将来を見据え、社会人として実際に求められる能力の長期的な育成を目指す必要があると考える。

そこで、高校3年間の中でキャリア発達を支える能力の育成から、卒業後も継続して就労生活を送るための礎が在学中に培われるよう、マトリックスに生涯にわたっての段階を新設することとした。

まずは、進路指導部員個々でたたき台を作成し、意見を出し合い、修正を図った。ポイントとしては、卒業後に就労を継続している卒業生の特徴的な取り組みや、現場実習や卒後巡回などで企業等から聞かせていただく職場からの生の声を反映させることなどを心掛けた。キーワードとして、「確立」、「継続」、「習慣化」、「定着」などを意識的に盛り込み、生涯にわたって思考・判断・表現し続けることを意識した（試案については資料1－1参照）。

次にマトリックスに基礎的・汎用的能力の視点を取り入れることとした。中央教育審議会から示された基礎的・汎用的能力については、「4領域8能力」を全て網羅しているものと考えられている。基礎的・汎用的能力における「課題対応能力」に相当する能力について、必ずしも前面に出されてはいなかったと言われていることから、基礎的・汎用的能力の視点を付加する必要性を感じた。そのことから、現存のマトリックスに基礎的・汎用的能力の視点でのすみ分けを行い、整理することとした（試案については資料1－2参照）。

さらに、卒後支援巡回時などに職場に聞き取りを行い、職場にとって基礎的・汎用的能力の諸能力で最も必要と思われる能力は何かを情報収集した。その結果については、学校としての視点と、職場としての視点がそれぞれ明確になるよう、記載場所を分けた（資料1－3①参照）。

(2) 現場実習日誌と評価表の整合性について

まずは2学年の日誌と評価表の整備を図ることとした。2学年時の実習の評価表が就労アセスメント代替の必要書類となり、学校独自で手直しすることはできないため、現場実習日誌側を評価表の項目と整合性を図り、職場からの評価と日誌を照らし合わせやすくし、就労に向けた視点での振り返りが行えるよう工夫を図った。指導の系統性がもたせられるよう、マトリックスの指導観点項目は生かし、評価表の項目がどこに関連しているかを整理した。日誌の指導観点項目が「心と体、知識」「コミュニケーション」「自己内省、知識・職業」「応用力、知識」の4に対し、評価表の項目が18あったため、すみ分けを行った（資料2－1、2－2）。

次に1学年の日誌と評価表の整合性を図った。基礎的・汎用的能力の観点についても要素として取り入れた（資料3－1、3－2、3－3）。最終的にでき上った全学年の日誌と評価表を照らし合わせ、段階的・系統的になっているかを確認した。

現場実習日誌に関しては、本校が開校してからマイナーチェンジを重ねながら、各学年で系統性を持たせられるよう、最近ではマトリックスも活用しながら現在の形に統一されてきた経緯がある。従って、段階的・系統的な部分に関しては、ほとんど調整を図る必要がないほどの仕上がりになっていた。その中で、昨年度の調査研究で「確認」、「丁寧さ」、「手早さ」などの基本的な取り組みの姿勢について評価や振り返りがしにくいことが課題として上がっていたため、1学年段階でそれらが盛り込めるよう工夫を図った。しかし、盛り込む項目が多岐にわたることで、内容の精査が必要となり、16項目から12項目に絞り、1学年は「丁寧さ」を優先的に盛り込み、「確認」、「手早さ」に関しては、2学年で盛り込むこととした。

(3) 企業パンフレット（冊子）の作成について

以前、道南の各事業所による「進路福祉セミナー」が実施されたが、そこでの情報をもとに施設パンフレット（冊子）を作成したが、図書室に常設することで、いつでも誰でも知りたい情報を得ることができるようになった。また、情報を毎年更新し、さらには、各事業所のパンフレットを各ホームルームに一部ずつ配り、いつでも閲覧できるように工夫を図ってきた。

そこで、施設パンフレットが情報を得るのに手軽であり、企業の情報も同じように得られたら進路指導も行いやすくなるのではないかと考え、企業パンフレット（冊子）を作成することとした。企業の情報を自ら得ようとする習慣が身につくとともに、求人票の見方を覚えられるツールになると考えた。

まずは、直近の卒業生の求人票を参考に情報を網羅したデータを作成した（資料4）。

作成時に気をつけたこととしては、賃金項目の見やすさを心掛けた。生徒にとって就労先を選択する際の大きな要素の一つとなっていることから、手当や残業代、昇給や賞与なども盛り込んだ。他にも、必要な資格や加入保険等は保護者が気にする部分であることから、求人票の内容を極力網羅することを心掛けた。

(4) 卒業生向けのキャリアに関するアンケートについて

新型コロナウイルス感染症の影響で、青年学級や一泊旅行などが中止となり、卒業生を招集しての行事が全てなくなってしまった。しかし、生徒の悩みや頑張っていることなどの現状を把握することは、特に社会人一年目の卒業生にとって必要なことと考えた。さらに、卒業してからの悩みや在学中に頑張っていて良かったことなどを、在学が知る機会を作ることができないかを考えた。

そこで、このような時期だからこそできることはないかを進路指導部内で意見を出し合い、アンケート形式で卒業生から状況確認や後輩へのメッセージとしていただくこととした。アンケートの内容については、就労移行支援事業所などに訪問した際、企業就労した人たちの就労先やコメントが記載されている掲示物を目にすることがあり、参考にさせていただいた。さらに、ホームルームの生徒たちに就労に向けて何を伝えたいかの意見も出し合い、職場から求められる力などについても盛り込み、試案を作成した。内容を精査し、最終的に「キャリアに関するアンケート」が完成した（資料5）。年間5回程度卒業生便りを発行しているが、7月発行分にアンケートを同封し、戻ってきたアンケート用紙については、掲示したり冊子にしたりすることで在校生に還元できると考えた。

3 成果と課題

(1) 今養版キャリアプランニング・マトリックスの改訂について

マトリックスについては、平成24年度からの第6次研究で取り組み試案を作成してからマイナーチェンジを繰り返し、現在の形へ進化している。近年、学校で完結するのではなく生涯に渡ってのキャリアを育む必要性を指摘されているため、卒業後の生活を目にする機会の多い進路指導部として生涯にわたっての段階を在学中から意識できる土壌を作るためにマトリックスの改訂に着手した。

職場からの視点についての情報も盛り込んだが、職場からの聞き取りを行うにあたり、それぞれの職種や業種に限らず、共通して求められる力が明確になった。接客業に限らず、工場系や清掃系の業種でも「コミュニケーション」については、対応能力としての必要性を指摘されている。挨拶や返事はもちろんのこと、休憩時間等に行われる会話や指示に対する受け答え方など、コミュニケーションを幅広く捉えていた。また、スマートフォンの普及などにより、休憩時間などに暇さえあれば操作していることについても言及されており、望ましいスマートフォンの扱い方についての知識を身につける必要性も指摘された。コミュニケーションそのものが、職場での居場所を作るための最強の武器であり、そこから生まれる協調性や困難を乗り越える力、素直さ、耐性、柔軟性、順応性などが、積極的にコミュニケーションをとることで備わってくることが知ることができたことは、今回聞き取りを行ったことでの成果と考えている。

生涯に渡っての段階については、おおむね整理することができた。しかし、各学年段階における育てたい力について「継続」とあるが、卒業後を見据えたキャリア発達を段階的に積み上げていくことを考えたときには、学年ごとに職業的発達にかかわる諸能力・育てたい力が明確に記されている必要があると考える。また、「教科等との関連」については、十分に備わっていない。人間関係、コミュニケーション、読み書きや計算など、様々な困難に直面することが予想されることから、働いてからも学び続ける必要があると考える。何に困り、何を改善すれば良いか焦点化する習慣を在学中から身に付けられたら、社会に出てからも自ら困難さを乗り越えようとするたくまさが備わるのではないかと考える。卒後支援で関係性が続くことから、何に困っているかが整理されている

だけでも、支援がしやすくなると考える。

このことから、育てたい力の継続項目については学年ごとに明記（参考資料1－3②）し、マトリックスに教科等との関連についての項目なども盛り込み、学びの連続性を意識できるような工夫を図っていくことが必要と考える（参考資料1－4①②③④⑤）。

今年度、マトリックスを活用するまでには至らなかったが、完成したものを試案として活用し、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、マイナーチェンジしながら活用しやすいツールになるよう整備を図り続けていきたい。

(2) 現場実習日誌と評価表の整合性

2学年の現場実習日誌を、評価表の項目と整合性を図った。並行して1学年のものも整合性を図った。その結果、使い勝手など、ホームルーム担任に意見を伺った。

1 学年

○成果

① 生徒の自己評価の支援ができた

生徒の実態に合わせて、項目ごとのバランスをみながら項目数を抑え、評価項目の文章表現を平易化した。その結果、生徒は「何についてどのように考えて自己評価したら良いか」を理解して評価を作成することができた。

② 生徒の自己評価と教師の他者評価の比較と充実が図られた

生徒の評価と教師の評価の同調性及び有意差がはっきり分かるようになったことで、評価の確度があがった。また双方の評価の有意差の原因を振り返りしやすくなった。次年度は評価者の教師が「実習先」に変わるが、同様にみることができると考えられる。

また、自己－他者評価の差については、実習に限らず普段から評価をする中で、生徒に自分の実態として認識できるよう、継続した指導を行うことが必要である。

③ 指標と記号の連携も問題なかった

評価は4つの指標を4つの記号で評価したので、特に問題はなかった。

○課題

① 発展的な評価項目の導入は難しい

基礎的・汎用的能力の4つの観点のうち、特にキャリアプランニング能力の項目について、「実習の経験をもとに自分の特性や進路のイメージを組み立てる」などの、発展的な要素をもつ項目については、1学年で生徒の自己評価が正確ではなく、かつ指導者側も新型コロナウイルス感染症による休校等で、事前の指導期間が短いこともあり、評価の観点としては採り入れにくかった。

② 評価観点の設定の仕方に課題がある

本校生徒の特徴として「社会関係形成・社会形成能力（コミュニケーション力）」と「自己理解・自己管理能力」に弱点をもつ生徒が多く、観点がそこに偏る可能性が高い。

また、課題対応能力も作業学習等の中での行動から導き出される指導場面の評価との結びつきが強く、数的処理（数学）や語彙能力（国語）などとの評価の結びつきが弱い。（指導時数も圧倒的に少ない。）

2 学年

生徒全員に評価表と、実習中の自分の評価を見せることで、どこに違いがあるかを理解させ、今後の課題を理解することができた。また、課題を忘れてしまうことがないように、定期的に設定した課題が克服できているか、学校生活全般を振り返って評価する機会を設けることで、常に課題を意識できるようになってきた。

実習後の面談では、評価表と担当者のコメントを参考にしながら行った。自らの反省と担当者のコメントを照らし合わせていくことで、それまで理想を多く語る生徒も、得意なことや不得意なこと、できることとできないことが少しずつ理解でき、現在の実力に合った進路先を考えるようになった。

以上のことから、一定の成果が得られたのではないかと考えている。

忍耐力やストレスマネジメントなどの「自己管理能力」、課題を発見・分析し、適切な計画を立て、課題を解決するなどの「課題対応能力」は、基礎的・汎用的能力で強化した要素であることから、活用できた部分であると考ええる。

課題となった部分も明確となった。基礎的・汎用的能力におけるキャリアプランニング能力や教科等との関連などへの意識が希薄であったかが伺える結果となった。今後は、様々な学習や行事の中で、基礎的・汎用的能力の観点を盛り込み、社会的・職業的自立に向けて学び続けられる土壌作りがキャリア教育を推進する中で必要と考える。

昨年度からの調査研究の流れで日誌と評価表を整理した。ホームルーム担任からの意見にもあるように、教師が生徒の育てたい力は何かを考え、日誌に反映し、生徒は実習で目標を意識して取り組み、その結果が外部からの評価として戻ってくることにより、改めて新たな目標設定につながる。日誌と評価表の整合性を図ることで、カリキュラム・マネジメントに必要な側面の一つである「教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCA サイクルを確立すること」に、社会に開かれた教育課程を目指す現場実習そのものがつながったのではないかと考えている。

日誌と評価表については、成果物としてこれからも進化させ続けていきたい。

(3) 企業パンフレット（冊子）の作成について

企業パンフレット（冊子）作成を行ったが、職員からの声として、手軽に手に取れるのは良いが、生徒が誰でも就労できると勘違いするケースも出てくるのではないかと意見をいただいた。冊子を見たときに、最も目が行くのが給料であることが予想される。13 万円から 15 万円程度の給料がもらえることを感覚として当たり前になった場合、就労継続支援事業所などでの工賃とのギャップを今まで以上に感じてしまうのではないかということが懸念される。

そのため、今年度については、作成はしたものは図書室に常設せず、教職員用の情報ツールとして職員室の進路指導部用の棚に常設することとした。

取り扱いについては、今後検討が必要である。他に必要な情報は、ホームページなどを参考にしながら情報を盛り込むなど、状況に応じて対応を考えていきたい。

(4) キャリアに関するアンケートについて

アンケートを郵送した際、返信されるのはわずかな数だろうと予想していたが、104 人中 28 人、約 4 分の 1 にあたる 26.9%の方が返信してくださるという結果となった。このことで、いかに卒業してからも学校とのつながりを大切にしてくださっているのかが伝わり、大変ありがたく思うのと卒業支援の大切さを改めて認識することとなった。

アンケート結果については、学校祭で保護者の来校もあることから、学校祭当日までに廊下へ掲示した。直筆のまま掲示も考えたのだが、字の濃さや大きさなど人それぞれ違いがあったことから、見やすさを優先しデータで起こしたものを掲示することとした。返信数が多かったこともあり、進路指導部内で在校生へのメッセージ性が強いものを厳選することとし、10名分のアンケート結果を掲示することとした。その結果、進路に関する学習時にアンケートに記載されている内容を引き合いに出していただくなど、一定の効果があつたのではないかと思える場面を見ることができた。

他の取り組みとして、アンケート結果を冊子にまとめ、図書室の進路コーナーに常設することも行った。先輩方のメッセージを見て、諸先輩方の勤めている職場に興味をもつことにより、事業所等のパンフレットにも興味をもって手に入る機会が増えるのではないかと考えている。そういった生徒自身の活動になることによって、生徒自身が進路選択・進路決定していくことに繋がるのではないかと考えている。問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせ、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考、必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定、伝える相手や状況に応じた表現、キャリア教育における思考力・判断力・表現力の育成につながっていると確信している。

新型コロナウイルス感染症の最中ではあるが、今まで当たり前に行われていた招集による卒後支援がいかに大切な“居場所”と捉えられていたかを知る機会となり、また、アンケート結果からも、在学中に学んだことが卒業後にも生かされる場面が多く存在するという点を改めて実感することにもつながったと考える。

これからの生活スタイルが見通せない状況の中ではあるが、その中だからこそできることはないかを模索するすばらしい機会となった。前例踏襲することの良さと新たなことに挑戦していくことを融合させることが、卒業生にとっても教職員にとっても、また在校生にとっても新たな発見へとつながり、場所や年齢など問わず必要なことと学び続けること、チャレンジし続けることの大切さを思い返す機会になったのではないかと考えている。これからも卒業生の声を反映させながら卒後支援の充実を図り、在校生へ還元できる取り組みを継続して行っていきたい。

(5) まとめ

第8次研究、キャリア発達を促すためのカリキュラム・マネジメントを目指し取り組んできた。これまで、進路指導の手引き、進路に関する情報発信の充実、実習日誌と評価表の整合性を図る、外部から求められる生徒像の周知・還元など、様々な角度から整備を図った。成果となった部分は深化を図り、課題となった部分は改善を図り、外部からの声も反映させながら生涯を通じた能力の育成や社会に貢献できる人材の育成につなげられるよう努めてきた。

進路指導部として進路（キャリア）に関する取り組みに特化している部分はあるが、全ての教育課程が卒業後の就労生活や生き方に結び付けられるよう組み立てられていると言っても過言ではないと考える。本校の教育目標が「豊かな心とつよい体をつくり 生涯にわたって自立し たくましく生きる生徒を育てる」とあり、目指す生徒像が「希望に向かって努力しやり遂げる生徒」「健やかな体をつくり安全に留意して生活できる生徒」「人と適切なコミュニケーションができる生徒」「自ら視野を広げ、豊かな心を持てる生徒」「働く喜びを知り、社会に貢献できる生徒」とあるように、全ての言葉が一生にわたって身に付けていくべき姿勢を育てたいと謳っていると捉えられる。

このことから、卒業後を見据えた指導を行う中で、自ら考え、判断し、実践するなどの能力の育成につなげ、取り組んできたことを振り返り、改善し、次の新たな取り組みにつなげるといった、生徒自らが一生にわたって PDCA サイクルを確立し続ける土壌作り・土台作りが大切であると考ええる。

我々が目指すカリキュラム・マネジメントは、最終的に卒業後社会人となる卒業生各々が自らの人生を分析するなどマネジメントし、永続的に発展していくことにつながることが理想と考える。

卒業生の取り組みが本人の能力となり財産となり、卒業生の頑張っている姿を見聞きした在校生が諸先輩方の卒業後の就労生活に憧れ、自身の取り組む姿勢を見直し、改善を図っていく。そういったサイクルが本校の伝統になっていくことが、本当の意味でのキャリアに関するカリキュラム・マネジメントにつながるのではないだろうか。

学びや学習は、高等養護学校で完結するのではなく、一生涯学び続けていくことが必要不可欠であり、そうすることで充実した就労生活を送ることにつながるのではないかと考えている。我々教職員は、学び続ける卒業生のサポートを行うことだけに焦点化するのではなく、在学中に学び続けるための素地や姿勢を育てていくことが必要であると考え。そのことから、進路指導部として企業などの職場の声だけではなく、卒業生の声も受け止めながら、在学中から社会で活躍できる人材の育成を目指すとともに、生徒のキャリア発達を効果的に促すキャリア教育の推進を図り続けていきたいと考えている。